



保健体育委員会による、かぜ予防講座。健康に感謝。



「畑の先生、ありがとうございます。」

「あたりまえ」に感謝できる子に

暖かい冬が続いています。いつもなら3月に入る頃に現れる南岸低気圧が、大学入試センター試験の受験生をあわてさせました。天気予報からは「例年並みの…」という言葉がなかなか聞かれません。私たちがあたりまえと思っていたことが、あたりまえではなくなってきました。

令和2年を迎え、3学期が始まりました。子どもたちは、冬休み中に家族の愛を体いっぱいにつめ込んだおかげで、実に穏やかで、且つやる気にあふれるスタートを切ることができました。ご家庭でのご指導に感謝申し上げます。学校での3学期は、「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それに応える」心情を育むことを大切にしたいと考えています。「感謝」「自立」「夢」「希望」をキーワードとした取組を重ね、3月の卒業式、学級解散式に向かいます。

そんな3学期の始まりにあたり、「ありがとう」の語源を調べてみました。ありがとうは「有り難し」からきています。ではその有り難いこととは何なのでしょう。平安時代の枕草子には、「有り難きもの」として、主人のことを悪く言わない従者や少しも欠点のない人など、文字通り存在しがたいものという意味として使われています。中世に入り、仏教思想が広まるとともに、奇跡（…めったに無いこと、あり得ないこと）が神仏の力によるものだ信じて、神仏に手を合わせて「有り難し」というようになり、感謝の意味が含まれ

るようになりました。そして、近世以降一般のお礼の言葉として使われるようになったとされています。

「ありがとう」が「有り難し」であるとする、その対義語は「あたりまえ」です。私たちは、日常の出来事があたりまえであると思って生活しています。それは、ある意味では幸せなことです。平和で恵まれた生活であることの証拠です。しかし、感謝を忘れ、自分一人で生きているような気になると、「なぜしてくれないんだ」「もっとこうして…」等と、苛立った心が人間関係を崩していくことにもなりかねません。「あたりまえ」の向こう側にはそれを支える人の存在があります。そのことに気付けたとき、私たちは「あたりまえ」であることに感謝できるのです。

子どもたちは、様々な係活動や当番活動、異年齢集団による活動を通して、支える側の思い、支えられる側の思いを経験します。仲間に迷惑をかけた、かけられたりします。仲間と共に学んだからこそできるようになった、分かるようになったことを実感します。子どもたちにとって、学校生活は、人としての営みがお互いの支え合いで成り立っていて、決して一人だけで生きていくことはできないことを学ぶ場でもあります。

日々の生活の中でちょっと立ち止まって、とすると忘れがちになる、「あたりまえ」であることの「ありがたさ」を考える機会を、子どもたちとつくりたいと思います。